

卒業式は苦手です

中津市長 奥塚 正典

小学校、中学校、高校の卒業式に1校ずつ順番に出席しています。加えてファビオラ看護学校、県の工科短期大学の卒業式にも参加します。

卒業式に臨む先生方、卒業生、保護者はそれぞれに思いがあります。先生にとっては、毎年のこととはいえ一人一人の生徒を未来へと送り出す日、生徒にとっては先生や友と教室で過ごす最後の日、保護者にとっては子どもの成長を喜び将来の幸せを願う日です。

校長から卒業証書が渡され、式は粛々と進行します。在校生送辞、卒業生答辞と終わりに近づくにつれ、しだいに誰もの気持ちが高まっていくのがわかります。卒業生が先生方や保護者に対して感謝の言葉を発するに至っては双方の気持ちの行き交いがこちらにも伝わってきます。

ここで私の記憶は50年以上前の小学校の卒業式に戻ります。その日は仲間と一緒に元気よく登校、今日で小学校とお別れ、いよいよ中学生になると気持ち弾んで臨んだ卒業式。すべて終わって帰ろうとした運動場に担任の先生が皆を待っていました。勉強、スポーツ、生活態度と親身になって厳しく鍛えてくれた先生、その顔を見たとき涙が出て一言もモノが言えず家に帰るまで無言のままでした。自分ながら予期せぬことで何故だかわかりませんでした。

出会いがあれば別れがある。楽しかったほどつらく切ない。それを小学生なりに感じたの



中学校卒業の日に

かもしれません。以来、卒業式はどうも苦手です。特に卒業生、保護者、先生の涙を見てもういけません。お祝い事なのにどうしても涙腺が緩むのです。でも、卒業は「終わり」ではなく「始まり」です。ならば、流す涙は明日へのエネルギーを生み出す強い力となっているにちがいありません。涙は自然にまかせましょう。